

産直と「ふれあい」で沿岸被災地の未来を拓く ～岩手県・JAいわて花巻の取り組み～

調査研究部 震災復興調査班

目次

- | | |
|--|-------------------------------------|
| 1. はじめに | 4. 地域住民との交流を促進するJA
独自企画「ふれあいプラン」 |
| 2. 直売所「母ちゃんハウスだあすこ」
で培ったノウハウを復興に活かす | 5. おわりに |
| 3. 沿岸部の自然条件を活かしたJAの
園芸振興 | |

1. はじめに

奥羽山脈沿いの秋田県境の西和賀地域から太平洋岸の釜石・大槌地域に至る東西120kmにわたる帯状に長い広大な地域を管内に持つ岩手県JAいわて花巻¹。同JA管内の沿岸部は、東日本大震災の大津波で壊滅的な被害を受けました。被災から4年。沿岸被災地の復興対策の要は、産直を核にした新たな園芸振興で、新たな地域資源を発掘するチャレンジも行われます。

今秋10月には直売所、JA支店、営農センターなどが1か所に集まる「沿岸営農拠点センター（仮称）」がオープンする予定で、被災地の復興は新たなステージを迎えます。復興のシンボルともいえる同センターの運営には、同JAが全国に先駆けて開設した農産物直売所「母ちゃんハウスだあすこ²」で培われたノウハウが活かされ、被災地の新しい「ふれあいの場」となることが期待されています。

同JAのこうした「ふれあいづくり」の取り組みは、被災地域のみならず管内全域で行われています。管内27の支店では、組合員・地域住民との交流を促進するための「ふれあいプラン」が企画され、役職員一丸となって実践されています。

本稿では、この「ふれあいプラン」の活動内容等も交えながら、地域創生の発想で被災地の復興を目指すJAいわて花巻の取り組みをレポートします。

2. 直売所「母ちゃんハウスだあすこ」 で培ったノウハウを復興に活かす

今年10月に大槌町に開設される予定の新たな沿岸営農拠点センター（以下、センター）。このセンターは復興予算で建設され、JAいわて花巻（以下、JA）がその運営主体となる。場所は現在のJA大槌支店と東部地区営農センターに隣接し、将来開通する三陸縦貫道の大槌インターチェンジからのアクセスも

1 JAいわて花巻管内は、岩手県花巻市、北上市、遠野市、釜石市、西和賀町、大槌町の4市2町

2 「だあすこ」という名は、岩手出身の詩人・童話作家、宮沢賢治の童話『種山ヶ原』に出てくる、伝統芸能「鬼剣舞（おにけんぱい）」の囃子の太鼓の音を擬音化した、「ダー、ダー、ダースコ、ダーダ」の一節からつけられた（詳細については、「母ちゃんハウスだあすこ」のウェブサイトをご参照願いたい）。



(出所) JAいわて花巻要覧「愛農土 いい土 いい水 いい心」より

図 JAいわて花巻管内エリア

よい。センターの敷地面積は約1,000㎡。うち建物面積は300㎡である。建設にあたっては津波対策として土地がかさ上げされており、地域の防災拠点としても機能するよう設計されている。また、2階に入る予定の“農業研修センター”は会議室主体のスペースで、JA女性部のイベントなどにも使い勝手がよく、被災地の住民交流の拠点としての役割を担う。メインの建物には直売所のほか、レストランや農産物加工施設、JA大槌支店とJA東部地区営農センターも入る。

直売所の店頭では地元農産物だけでなく、提携関係にある全国37のJA直売所の農産物も販売する。農産加工は惣菜を中心に考えているが、地元漁協等とも連携し、水産物や水産加工品を出品してもらうほか、農産と水産のコラボレーション企画も検討している。

センターの施設名称は公募で決まるというが、JAの高橋専太郎組合長は「できれば直売所には“母ちゃんハウスだあすこ”の名前

を付けたい」と話す。

平成9（1997）年に誕生した農産物直売所「母ちゃんハウスだあすこ」（以下、だあすこ）は、今や全国から視察者が絶えないJA直売所の先駆的存在である。その企画提案者が高橋組合長だった（当時はJAの企画管理部長）。開業当初は、経費節減のためプレハブ施設で、空調も事務所の使い古しを利用するなど、大変苦労したという。高橋組合長は「先例がなかろうと、地域の未来に必要な選択をしてくれた当時のトップ（瀬川理右エ門元組



大槌町沿岸営農拠点センターの完成予想図



JAいわて花巻 高橋専太郎組合長

合長)の英断と、だあすこ初代店長で女性部担当の生活指導員だった高橋テツさん(前JA理事)の頑張り、品揃えの確保・充実に協力しようと自ら畑を耕し出荷してくれた女性部員たちの存在が大きかった」と当時を懐かしそうに振り返る。その後、だあすこは売り場の増築、積極的な広報活動、全国の直売所との業務提携等、様々な経営努力を重ねて成長した。現在の年間売り上げは10億円に達し、農家所得の向上にもつながった。開業当時130人だった出荷生産者も330人に増えた。

直売所の存在意義について高橋組合長は、「直売所事業は、高齢の組合員の生きがい対策でもある。直売所に農産物を出荷する高齢農家の生き活きとした顔を見るたびに、そのことを実感している。また、生産者と消費者が交流する『ふれあいの場』として、みんなが力を合わせるコミュニティ活動の拠点にもなっている。そこには“結いの心”の原点がある」と語る。

高橋組合長は、沿岸被災地の復興対策の要となるセンターの開設にあたって、「直売所では、まず地元で食べてくれる品目から揃える」とJA職員に大号令を発したという。そこには、自らの経験にもとづく地域創生の青

写真がある。センターのオープンをテコとして、沿岸部では地域資源を活かす6次産業化を進めようとしている。農産と水産のコラボレーション企画もその取組みの一環だ。JA女性部が、漁協と連携して新たな地域食材資源の発掘に取り組み、地元の海の幸と山の幸をふんだんに盛り込んだレストランメニューの開発を進めている。特産加工品の開発は地元雇用の創出にもつながり、また、売れる場所があれば技術もおのずと向上し、より付加価値の高い加工品の出荷も可能になるという好循環が生まれる。このことはすでに「だあすこ」で実証済みだ。

センターの近くには、小・中学校が移転してくるようになってきている。また、かさ上げされた復興団地の完成も近い。だあすこの八重樫正基店長は「だあすこで培われたノウハウを存分に発揮し、内陸部にある本店と同様、沿岸部でも消費者が安心して来店できる店づくり、例えば仮設住まいの人たちが直売所に買い物に来てほっとしてもらえるような店にしたい。また、被災地の将来のためにも、地元の出荷農家会員数の増加と定着を目指したい」と、オープンに向けての意気込みを語る。



「母ちゃんハウスだあすこ」本店



買い物客でにぎわう「だあすこ」本店

3. 沿岸部の自然条件を活かした J A の園芸振興

J A では、震災で大きな被害を受けた沿岸 3 支店（大槌、^{うのすまい}鶴住居、釜石）管内の復興支援の柱に園芸振興を据え、「沿岸園芸 1 億円団地構想」を掲げている。この構想は元々、J A 管内 5 億円団地構想（平成 20 年に合併した現 J A 管内の行政区域に概ね該当する花巻・北上・西和賀・遠野・沿岸部（釜石市と大槌町）の 5 区域が対象）の中の 1 つだったが、釜石市郊外の^{かつし}甲子地区に園芸団地を建設し、被災沿岸部の農業復興対策として産直をテコにした園芸振興を目指すことになった。沿岸部は、世界三大漁場にも数えられる三陸沖の漁業資源の陰に隠れて目立たないが、陸地側の冬季でも温暖な気候は園芸に向いている。

この構想実現に向けて J A では、沿岸 3 支店管内の農家を結集すべく、ハード面ではセンターへ周年出荷する野菜と花きの栽培作付け奨励を、またソフト面では、簡便な野菜栽培暦を活用した園芸相談会の開催ときめの細かい営農・巡回指導などの対策を講じた。周年出荷に向けた作付け奨励については、行政等（県、市、町、農業共済組合）で組織する

釜石・大槌地域農業振興協議会と連携して進めている。

J A 東部地区営農センター長の菊池清重さんは「J A だけでなく関係機関を巻き込むことで、構想の実現が果たせる。みんなが利用できる野菜栽培暦を作ったのもそのため。地域の気候と特性を活かし、果菜類、根菜類、葉茎菜類、豆類など約 70 品目の播種から収穫までの作業期がひと目で簡単に分かる一覧表になっている」と、その意義を説く。

こうした取組みの甲斐もあって、沿岸 3 支店管内の農家には、新たにイチゴ、ハクサイ、キャベツ、花卉などの栽培に取り組む動きが出てきた。夏野菜は果菜類を中心に、栽培品目、面積とも増えている。また、冬場でも青野菜が作れるよう、J A 本店からも中古ハウスを提供するなどして沿岸部の園芸振興を支援している。

現地指導に当たる J A 東部地区営農センターの高橋譲営農指導員は「もともと沿岸部は農家 1 人 1 人の農地が少なく、野菜の系統出荷もピーマン以外はなかった。釜石には共選場も集荷場もないが、これからは市場を通らない産直事業が要になる。この地域は冬でも雪が積もることはないし、園芸団地として大いに期待できる」と、熱く語る。

園芸振興に成果をあげる野菜栽培暦

4. 地域住民との交流を促進するJA独自企画「ふれあいプラン」

人口急減と超高齢化への対応はいまや国家的課題である。政府一体となって「地方創生」に向けた様々なプランが打ち出されてもいる。JA管内でも多くの集落で高齢化と人口減少が著しく進んでおり、被災地の復興も含めて、地域全体が自律的に発展していけるコミュニティ基盤づくりが急務となっている。

こうした中でJAは平成25年に組合員・地域住民との交流促進企画「ふれあいプラン」を全地域でスタートさせた。同プランは、組合員・地域住民との「ふれあいの場」となるイベントを企画するもので、管内27支店長がリーダーとなって支店ごとに実施される。

高橋組合長は「JA幹部や支店長、職員が自ら出向き、組合員・地域住民と関わりをもつことで絆が深まる。全27支店共通のテーマは“持続的農業の確立と農村の伝統文化を継承した支店経営”だ。各支店長にはこのことをずっと言い続けている。同じJA管内といっても伝統や文化は地域によって様々だ。それぞれの豊かな地域資源を守り活かすために

は、各支店が活動の核とならなければならない」と持論を語る。

沿岸3支店合同での「ふれあいプラン」も実施されている。昨年、大槌町体育館で開催されたセンター開所のプレイベントには、3支店管内の農家約100人と営農担当者を含む支店職員等50人のほか、JA本店からも組合長以下常勤役員が参加した。講演会や地元の獅子踊り、軽トラ市などを開催して親睦を深めた。

また、夏祭り「釜石よいさ」には、沿岸3支店職員がJA名が入ったお揃いの浴衣を着てパレードに参加した。域外の人々とも積極的に交流を図っている。菅沼浩弥釜石支店長によると、今年5月に行われた拓殖大学（東京）の学生ボランティア活動に、昨年を引き続き花壇苗を提供し、JR釜石駅前と市内商店街の道路脇歩道への植え込み作業を手伝ったという。今年3月に着任した伊藤暢英鶴住居支店長は「これからも、JAがもっと身近な存在になれるよう、被災した3支店が連携して地域の人たちと広く交流を深めていきたい」と話す。



親睦を深めた沿岸合同ふれあいプラン



釜石よいさに参加した釜石支店の職員

J Aで「ふれあいプラン」が積極的に取り組まれているのは、世代を超えて地域貢献活動に熱心に取り組んできた“伝統”に負うところも大きい。

現在、J Aが実践している地域貢献活動としては、①職員一斉訪問による毎月の見守り活動、②集落貢献活動、③農村の歴史的伝統文化の継承活動、④職員消防団員による防災活動、⑤生活文化活動（健康・福祉活動、子育て支援・食育活動等）がある。とりわけ、子育て支援活動については全国の先駆的な存在であり、すでに昭和40年代前半には、農作業で忙しい農家のために設けた託児所を法人化し、農協立の幼稚園を運営していた（今は学校法人経営）。これが現在、子育て中の女性に交流と憩いの場を提供する「わいわいフリースペース」の源流となっている。ちなみにこの活動は、J Aが平成元年に創建した「農協野田神社」内の施設で行われている。高橋組合長は「新しいことや女性の力をどんどん取り入れていくのがうちの特長」と話す。

『美しい村は最初からあった訳ではない。そこには村人たちがいて、美しい村ができた



平成元年に創建された農協野田神社

のだ』——これは地元にゆかりのある民俗学者・柳田國男の言葉だが、高橋組合長はこの言葉が大好きで、講演でもよく引用するという。「この“村人たち”がつくったのが協同組合だ。その大本には農村の精神文化を象徴する『結いの心』がある。これを絶対に忘れてはいけない」と力説する。震災時の「白米1升緊急支援運動³」や、被災した沿岸3支店の臨時店舗をいち早く開業したのも、この地に生きた先輩たちが綿々と培ってきた精神的土壌があったからだという。宮沢賢治を生んだこの地域には、昔から伝わる歴史的な伝統芸能や文化がたくさんある。郷土の食文化、伝統文化を守り後世に繋ぐことも「ふれあいプラン」の大きな柱と位置付けられている。

高橋組合長はJ A職員に対し「自分の命は自分で守れ」と説き、消防団員になるよう勧めている。「花巻市内の消防団員は約3,000人。そのほとんどがJ Aの組合員とJ A職員だ。困った時に助け合う相互扶助の精神は消防団活動に凝縮されている」という信念からだという。



J A職員も多数参加している消防団活動

3 東日本大震災直後、炊き出しの用の米が不足しているという沿岸被災者からの訴えに対応するため、J Aでは全組合員に対し白米で1升の提供を呼びかけ46トンの白米が集まった。この白米の炊き出しには、多くのJ A女性部員が携わった。

5. おわりに

現地調査を通じて、今年10月にオープン予定の沿岸被災地の直売所は、地域の「ふれあいの場」として、被災地での新しいまちづくりに大いに貢献することになると確信しました。そこは、高橋組合長のコメントにもあった「結いの心」を育む拠点といえるかもしれません。

引き続き調査を進めてまいりたいと思います。

(謝辞)

大変お忙しいところ、聞き取り調査等にご協力いただきましたJAいわて花巻・高橋専太郎組合長ほか職員の皆様、消防団活動の写真をご提供いただきました花巻市消防本部にこの場を借りて御礼申し上げます。

*本レポートは、2014年4月25日、2015年3月24日、2015年5月11日に行った現地調査にもとづき、とりまとめたものです。

(参考資料)

- ・JAいわて花巻ウェブサイト (<http://www.jahanamaki.or.jp/> 2015.6.1 閲覧)
- ・母ちゃんハウスだあすこウェブサイト (<http://dasuko.shop-pro.jp/> 2015.6.1 閲覧)